

世界共通の課題の解決に向け 新たな目標の設定に貢献したい

ミレニアム開発目標(MDGs)の達成期限を2015年に控え、国際社会では活発な議論が繰り広げられている。JICA企画部の岡田未来さんは、他国の援助機関や国際機関と協力しながら、新たな目標の設定に取り組んでいる。

東南アジアで 日本の支援を知る

大学1年生の時にタイ東北部で暮らすラフ族の村でホームステイをしながら、教会を建てるボランティアに参加しました。貧しいながらもみんなで助け合いながら明るく生きる彼らの姿が印象的で、それ以来、開発途上国に興味を持つようになりました。

大学院在学中には、NGOや国際機関のインターンとして東南アジアを訪れ、行く先々で「あの橋は日本人が建てたんだよ」「隣の病院で日本人が働いているよ」などと、うれしそうに話す現地の人たちに出会いました。日本の国際協力が形としてだけでなく、人々の記憶に残っていることを誇りに感じ、私もそんな仕事に携わりたいと思いました。

他国と協力して 事業の幅を広げる

2010年には、アフリカ南部のザンビアに赴任しました。現地では多くの人が安全な水を使えておらず、日本は給水施設の設置などを進めていました。他国の援助機関や国際機関なども給水分野での協力を行っていたため、より良い支援を展開できるように積極的に情報を交換していました。

ある日、ドイツの援助関係者との何気ない会話の中で、「下痢症に苦しむ子どもたちのために、手洗いを普及できないか」という話

になりました。どうしたら興味を持つてもらえるか話をつめていき、コミュニティに住む子どもたち向けのサッカーイベントを活用してはと。ザンビア、オーストラリアの協力も得て、約300人の子どもたちがサッカーのトーナメントを戦い、空き時間に手洗いについて学べるワークショップを開くというアイデアでした。

この時、日本単独ではなく他機関と協力したからこそ、多くの参加者からの関心を集めることができました。途上国だけでなく、他の援助関係者と力を合わせることも国際協力の醍醐味だと感じました。

説得力を高めるため 他機関を巻き込む

帰国後は企画部に配属されました。ミレニアム開発目標(MDGs)の達成期限を2015年に控え、国連を中心に新たな開発目標の設定が進められています。日本も積極的に議論に参加し、特に「持続可能な都市開発」が重要だと訴えてきました。世界の都市では人口が急増し、環境破壊やエネルギー消費の増加などが大きな問題になっているからです。かつて、高度経済成長の過程で発生した公害を乗り越えた日本の経験が生かせる分野でもあります。

この考えを世界に発信したいと、2014年1月、ニューヨークの国連本部でサイドイベントを開催することになりました。でも、

日本の意見だけでは説得力がない。そこでフランスや経済協力開発機構(OECD)、7つの国連機関を巻き込み、共催することにしたのです。

この3カ月前に、北九州市で環境に配慮した都市づくりをテーマにした国際会議がありま

した。実はこの時、私は他国の政府関係者や国際機関の担当者を見つけては声を掛け、「1月のサイドイベントに協力してほしい」と打診し、その後も議論の内容や日程などについてメールでやり取りしていました。イベント当日は「災害に強い都市づくりが重要」「都市と農村のつながりを強化すべき」など多くの意見が飛び交い、それらをまとめて資料を作成し、各国の代表者に配りました。ザンビアの時と同様に、やはり、仲間がいるとできることが広がったのです。「あのイベント、とても良かったよ」と多くの人に声を掛けてもらえて達成感がありました。

国際社会が丸となって、世界の課題解決に取り組むためには、新たな共通の開発目標が必要です。他機関と協力しながら、より良い社会の実現に向けて貢献していきたいです。



JICA企画部
国際援助協調企画室

岡田 未来
OKADA Miku

大学院卒業後、2005年にJICAに就職。JICA九州、人間開発部、ザンビア事務所を経て、2013年8月から現職。



国連本部でのサイドイベント。岡田さんの働き掛けもあり、多くの各国政府、援助関係者が参加した